町づくり研究所の報告

西　和夫*

Laboratory of town planning

Kazuo NISHI*

１．はじめに

平成 18 年度に工学研究所で「町づくり研究所」の活動が承認され、研究所設置が大学当局から実際に許可されたのは翌平成 19 年９月であった。以後、今年度にかけて活動を進めてきた。以上にその報告をする。

２．平成 19・20 年度の活動

平成 19・20 年度の活動を整理し、まとめると以下の通りである。

平成 19 年度

○平成 19 年９月

大学より研究所設置が許可された。

○平成 19 年 10 月１日

神奈川大学工学研究所西和夫と、松代の「ＮＰＯ法人夢空間松代のまちと心を育てる会」理事長山本和男、および長井の「指定非常利活動法人長井まちづくりＮＰＯセンター」代表理事小幡和之、との間にそれぞれ「町づくり研究所に関する覚書」を取り交わした。ふたつのＮＰＯの住所等は次の通りである。

ＮＰＯ法人夢空間松代のまちと心を育てる会

長野市松代町伊勢町５４８－１

指定非常利活動法人長井まちづくりＮＰＯセンター

長井市十日町１－１０－２３

○平成 19 年 11 月 24 日

長野市松代町石切町松真館において松代の町づくり研究所の開所式が行われた。西和夫および西研究室の院生・学生が出席。

○平成 19 年 11 月 24 日

松代町町並み調査。西和夫の他、院生・学生９人参加。

○平成 19 年 12 月９日

長井市大町小桜館において長井の町づくり研究所の開所式が行われた。西和夫および西研究室の院生・学生が出席。

○平成 19 年 12 月 18 日

神奈川大学長に宛てて、松代町と長井市でそれぞれ開所式が行われたことを報告する「工学研究所プロジェクト研究『町づくり研究所』開設の御報告」を提出した。

○平成 19 年 12 月 19 日・20 日

長井市町並み調査。西和夫の他、院生・学生６人参加。

○平成 20 年２月８日

長野市松代町サンホール・マツシロ２階ホールにおいて、研究所開設記念シンポジウム「地域の歴史遺産を活かしたまちづくり」が開催された。コーディネーターを西和夫が務め、企画と出演者の人選・交渉を行った。参加者１７０名。市民だけでなく、周辺自治体からの参加が多かった。また、終了後、地元ＮＰＯと神奈川大学教員・学生との意見交換会が開かれ、今後の事業等についての相談を行った。

○平成 20 年３月 16 日

長井市タスパークホテルコンベンションホールにて、研究所開設記念シンポジウム「歴史を活かした長井のまちづくり」が開催された。コーディネーターを西和夫が務め、企画と出演者の人選・交渉を行った。参加者２００名。市民だけでなく、長井市役所、商工会議所、等の参加が多かった。なおこのシンポジウムにお

*教授　建築学科
Professor, Dept. of Architecture

いて、参加資料として『長井の歴史と魅力、歴史を生かした町づくりを目指して』（Ｂ６版３２頁､オールカラー版。）を作成し、配布した。また、終了後、地元ＮＰＯ、商工会議所、市役所と神奈川大学教員・学生との意見交換会が開かれ、今後の事業等について相談を行った。

○平成 20 年 3 月 17 日

長井町並み調査。西和夫の他、山家京子教授および院生・学生８人参加。

平成 21 年度

○平成 20 年 5 月 29 日

長崎県諫早市で開催された登録文化財を考える会で、町づくりの考え方について西が神奈川大学の町づくり研究所の活動について報告した。

○平成 20 年 6 月 1 日

愛知県犬山市で開催された講演会で神奈川大学町づくり研究所の活動について西が報告した。

○平成 20 年 6 月 13 日～15 日

長井市において、文化財建造物調査を地元ＮＰＯと共同で実施。神奈川大学から西のほか院生２人、学生５人が参加した。

○平成 20 年 6 月 4 日～6 日

長井市の町づくり研究所の成果を知って実際の調査の様子を具体的に知りたいとの依頼を受け、宮城県丸森町において歴史的建造物の調査を実施。町長、教育委員会等に神奈川大学町づくり研究所の活動を西が報告。

○平成 20 年 7 月 15 日～17 日

神奈川大学の町づくり研究所の活動を知って実際の調査の様子を具体的に知りたいとの依頼を受け、石川県七尾市一本杉地区で歴史的建造物の調査を実施。地元町づくり団体等に神奈川大学の町づくり研究所の活動について報告。西ほか院生１人、学生１人が参加。

○平成 20 年 7 月 31 日

長野市松代町の教育委員会文化財課主催の文化財保存の会議で神奈川大学の町づくり研究所の活動について報告。引続き地元ＮＰＯと神奈川大学町づくり研究所の会議で今年度の活動について相談。

○平成 20 年 8 月 14 日～16 日

長野市松代町において町づくりのための文化財建造物調査を実施。院生１人、学生２人参加。

○平成 20 年 9 月 6 日～8 日

長井市・長野市松代町の町づくり研究所の活動を知って実際の調査の様子を知りたいとの依頼を受け、宮城県丸森町において歴史的建造物調査を実施。町長、副町長、教育委員会等に神奈川大学町づくり研究所の活動について西が報告。院生２人、学生２人が参加。

○平成 20 年 9 月 19 日

広島大学で開催された日本建築学会の建築史・意匠分野の会合において、西が神奈川大学町づくり研究所の活動について建築史研究者たちに報告。

３．発表論文

町づくり研究所の活動に関する成果として西ほか大学院生・卒論学生が次の論文を発表した。

○西和夫『長井の歴史と魅力―「歴史を生かした町づくり」を目指して―』２００８年３月、神奈川大学町づくり研究所

○大川井寛子『山形県長井市における歴史的建造物の調査検討―歴史を生かした町づくりを目指して』２００７年度神奈川大学大学院修士論文

○宇野洋平『長野市松代町における歴史的建造物の調査検討―調査検討と金箱力家住宅の利活用提案』２００７年度神奈川大学卒業論文

○新美琢也『木造駅舎についての調査検討―西大塚駅・長井駅・羽前成田駅・松代駅を中心に』２００７年度神奈川大学卒業論文

４．長井市および長野市松代町と神奈川大学の町づくり研究所に関する新聞記事

長井市および長野市松代町のそれぞれの地域ＮＰＯと神奈川大学とが協力しての町づくり研究所について、新聞報道がさまざまに行われた。記事のタイトルだけを次にあげておく。

○松代に「町づくり研究所」、神奈川大学と長野のＮＰＯ二十四日開設、古い建造物、大学の調査活動――信濃毎日新聞、二〇〇七年十一月十日。

○松代に神奈川大研究所、長野　町並み保存、協力・交流――信濃毎日新聞、二〇〇七年十一月二十五日。

○松代町づくり研　開設、調査報告や講演など計画、夢空間と神奈川大タッグ――長野市民新聞、二〇〇七年十一月二十七日。

○長井に「町づくり研」、あす開設、地元ＮＰＯと神奈川大共同、歴史的建造物を生かし「活性化の拠点」担う――山形新聞、二〇〇七年十二月八日。

○地域活動の拠点に、「町づくり研」開所式――山形新聞、二〇〇七年十二月十一日。

○街並み生かし活性化、神奈川大、研究拠点を開設、歴史遺産残る長野・山形に――神奈川新聞、二〇〇八年一月一三日。

５．町づくり研究の背景

町づくり研究所をつくるに至った背景をここで述べておこう。

私の研究室には卒業生の同窓会があり、人数は３００人ほどになった。２年に１回、今は毎年、秋に集まる。建築史の研究室だから皆、建築史を学んで卒業したわけだが、建築史を職業としている人は少ない。設計事務所、ゼネコン、行政など仕事はさまざまで、建築から離れた人も多い。その人たちが全国各地から集まってくる。出席できなくても、手紙・メール・電話で近況を伝えてくる。

そのなかに、歴史的な建物を大事にしたいと考える人がいる。仕事とは無関係に時間を見つけては建物を見て歩く。歴史を感じるものに出会うとうれしくなる、そんな人たちだ。その人たちはまた、建物が次々に壊される事態に直面する。最初は単に残念だ、もったいない、残せばいいのに、と思っていたが、そのうちなんとか残せないものか、と考えるようになる。専門家でもないし、文化財担当者に知り合いもいない。自分の仕事が忙しいから、いわゆる保存運動に首を突っ込む余裕もない。いや、有名建築ではないから、保存運動などない。

年１回研究室同窓会に出て、同じような事情の人がほかにもいることを知る。彼らは、「なんとかできませんかね」と私に言う。私もなんとかしたいとは思うけど、すぐになんとかする能力はない。「よし、一度見に行こうか」、こう答えるのがやっとだ。

そして現地を見に行く。同窓生が案内してくれる。たったひとりでなんとかしたいと苦労している人の悩みがひしひしと伝わってくる。悲鳴が耳もとで聞こえる。そこで、どんな建物が、どこに、どのくらいあるか調べてみようか、ということになる。私ひとりだけではとても調べきれない。学生・大学院生の若さとエネルギー、これに頼ることになる。

自分でやるしかない

こんなこともあった。ある市で建物の復原事業が始まり、行政が委員会をつくった。私も呼ばれてそこへ通う。通っているうち、あることに気づいた。行くたびに町の建物がひとつ、またひとつと壊され、空地になっている。町並みが歯抜け状態になる。せっかく歴史的雰囲気があるのに、残念だ。そう思って行政の担当者になんとかしませんかと提案した。返ってきた答えはこうだ。予算がない、人手がない、専門家もいない。そしてこう付け加える。うちの町に古い建物なんかありませんよ。

次の委員会にまた行く。またまた空地が増え、駐車場だらけの町になっている。私はまた同じことを言う。返ってくる返事はやはり同じ。そのうちにひとつ、またひとつ建物が消える。

研究室に帰ってきたとき、私はぷりぷり怒っていたらしい。そのとき一人の大学院生にこう言われた。怒っていないで、私たちでやりましょうよ。ハッと私は気づく。そうだ、怒っていてもことは進まない。自分でやるしかない。誰かがやってくれると思うのが間違いなのだ。言われて気づくなんて、お恥ずかしい。私はその大学院生（今は大学の先生だ）に今も頭が上がらない。

こうして調査が始まる。まず学生たちのトレーニングだ。調査方法を身につける。礼儀作法、これも大事。調査対象の持ち主は高齢者が多い。若者の服装や行動に違和感を持つ人もいるだろう。そうなると調査どころではない。でも、こういうことは教育のひとつだから、まあなんとかなる。なんとかならないのが費用と、さまざまな制約だ。まず第一は調査費の問題だ。どうやって調達するか。もともと研究費は少ないし、学生の旅費に使う事は許されない。そして、学生を連れ出して事故でも起こったらどうするか、これも難しい問題だ。研究費は学生の旅費に使うことは許されない。いくつかの研究助成金にも応募した。しかし今どき建物が消えつつあるところなんて全国にいくらでもある。珍しくもないからか、助成金は取れない。そうしているうちにも建物は壊される。早く調査し、対策を練らなければならない。時間との勝負だ。こうなったらやるしかない。

町並み調査と町づくり

という具合で、建物の調査が始まる。実測をし、聞き取りをする。最初は胡散臭げに遠くから眺めていた町の人たちが、何してるの、と学生に問いかけてくるようになる。夏、かんかん照りのなかで学生が黙々と実測する。ちょっと店の中にお入りよ。クーラーで涼んでいきなさい。ありがたくお店に入れていただく。お店の人と話をする。ふーん、君たち建物の調査をしているのか。それだったら何々さんの家を紹介してあげるよ。あそこも古いよ。

何回かその町に通ううち、あっ、また来てくれたんですね、と町の人たちが笑顔で迎えてくれるようになる。こうなると調査も進む。歴史的な建物の存在がわかってくると、町の人はこう言う。これを残していくにはどうすればいいですか。歴史的な建物を町の中に生かす検討が始まる。その検討がいつの間にか町づくりになる。歴史を生かした町

づくりだ。

卒業生と力を合わせて町並み調査と町づくりをしたのは、平戸市（長崎県）・壱岐市勝本浦（長崎県）・江津市本町（島根県）・長野市松代町（長野県）・旧中山道鵜沼宿（岐阜県各務原市）・長井市（山形県）である。ほぼ終って、今後の動きを見守っているところ、まだ調査中のところ、地元の人たちが積極的に動き出したところ、まだまだ問題だらけのところ、さまざまだ。調査費用は、自分たちの負担、行政が一部出してくれたところ、助成金がとれたところ、これもいろいろだ。

われわれの行動主体は大学院生・学生だ。そして調査の手法、知的行動の裏づけ、それは「建築史」である。建築史を生かして調査し、町づくりをする。

学生よ、町へ出よう

調査は何のためにするか。言わずもがなだが地元のためにする。建物が保全され町が元気になるために、地元の人たちと一緒になって町づくりをする。社会貢献という言葉を使うのは少々大げさな気もするが、建築史の社会貢献である。

町並み調査と町づくりは、建築史教育の一環でもある。学生と一緒に私も町へ出る。町で行動する。私はいつも、「学生よ、町へ出よう」とけしかける。町に出なくても研究をしっかりやればそれ自体が社会貢献だ、と言う人もいる。それはそうだが、歴史的な建物が次々に姿を消している現在、学生と町へ出る活動を続けていきたい、そう思って今日もあちこち飛び回り、町づくり実行の具体的な試みとして町づくり研究所を長野市と長井市につくったのである。